アーティストインタビュー
上島奈津子さん

－上島さんは、出身は仙台ですか？

上島：はい、ずっと、生まれも育ちも仙台で。生息しております。

－（笑)。仙台でどんな子ども時代を。

上島：どんな、ふつうの子どもでした（笑)。でもそんな、演劇やるような、目立って「おー」とかっていう感じでは全然なくて。むしろ、そっちの端っこの隅っこにいて、静かに人を見ているような（笑）感じの子でしたね。

－あんまり活発というほうでは？

上島：そうね。活発ではなかったね。でも絵本とかやっぱり子どもの時は好きで、母が、その当時はカセットとかじゃなくてレコードで。絵本のストーリーを読んでる俳優さんのレコードが付いてるのが毎月来て、それを聴きながら、何回も何回も聴きながら、まねして読んだりとか、そういうことはしてたみたい。

－お芝居を、一番最初に始めたのは？

上島：本当に最初は、小学校 6 年生の演劇クラブで。本当はテニスクラブに入りたかったんですけど、いっぱいで。じゃんけんしたら負けちゃって。人がいないとこ行ってくださいって言って、その時に演劇クラブがあって。なんでそこに行こっかなって思ったかなって考えると、『ガラスの仮面』が好きだったのね。漫画読んでて。お芝居ってどんなことするのかなとかってちょっと興味があって、それで入ったのが最初です。でも全然、指導してくれる先生とかも誰もいなかったので。小学校 5 年生か、1 年下の人で演劇大好きな女の子で、まだ覚えてますけど、その子がこういうお芝居あるよとかいろいろ教えてくれて。おカネもなかったんで観には行けなかったんですけど、生まれて初めて観たのが、仙台に児童劇団、放送劇団みたいなのがあったんですね。そこの『森は生きている』を観た

のが生まれて初めてでした（笑）。

－それが小学校高学年ですか。

上島：６年生。で、発表会とかやって、見よう見まねでこういう感じかな、ああいう感じかなみたいな感じでやったのが本当の初めて。

－その小学校の演劇クラブの発表会っていうのは、学芸会みたいなのとはまた別で？

上島：クラブ発表会って言うんだね。いろんな部の発表っていうので、そういうのが３月に設けられていて、それでステージで発表しますとか。演出もいないし、棒立ちに立って（笑）、セリフを言ってたっていう。それが一番初めですかね。そのあとは、中学校、高校と演劇部にやっぱりいて、やっぱり演劇が面白いなって思えたのは高校生の高校演劇からで。脚本決まって読んで、自分なりにやっていくじゃないですか。でも、いろんな人が考えているのが全然違ってて、えー、こんなに違うんだみたいなことを意思統一していくっていう過程とか。音響とか照明入るだけで全然世界が変わるじゃないですか。みんなで一緒に作るってすごい楽しいし面白いし、自分の想像したことを超えていくんだって。つたない芝居だとは思うんですけど。そういうふうに思ったのが初めて思えて。なんだ演劇面白いぞって。その時にお芝居もいろいろ、部に招待券とかいっぱいくるんですよ。お小遣いないから招待券で、在仙の劇団をいっぱい観に行って。あ、これが好きだとか、あれはいまいちだったとか（笑）。そういうのを、一生懸命感想文をまめに書いたりとかしてましたね。

－高校生で演劇楽しいんだなっていうことに目覚めて。そのあとも大学で。

上島：大学も演劇部（笑）。なんか楽しいからやってたんですね。仲間内で楽しい楽しいみたいなノリではあったと思うんですけど。でも高校の時に在仙の劇団で観たお芝居がすごくよくて。部に案内とか送ってくるけど、卒業したらそういうのが来なくなっちゃうと思って。手紙を書いて、劇団の人に手紙を書いて、すごく良かったんで、よかったらダイレクトメール私のところに直接送ってく

ださいみたいな、そういうのを手紙で書いて送って、そしたら返事が来て、文通してました（笑）。

－20 歳、30 歳、40 歳、50 歳だったら、何かお芝居を続けていく中で、区切りになったものとか出来事はありましたか。

上島：そうですね。私が仕事を辞めて演劇やろうって言ってる時が、仙台市が演劇に力を入れている時期で、仙台演劇祭とか。それも、結構トップで走ってるような劇団を全部集めて演劇祭に出てもらったりとか、そういう時期だったんですね。シアター・ムーブメントっていう、地域滞在型で東京から宮田慶子さんを呼んできて、仙台の俳優さんとワークショップせえっていうことで舞台を作ったんですけど。それまで小さい劇団の中だけでやってたんですけど、いろんな俳優さんとか一緒にやるっていうこと自体が初めてだったので、ものすごく刺激を受けましたね。「こんなに私できないんだ」みたいな感じのあったけど。すごくいろんな人に知り合えたのはすごく刺激的だったかな。そこから劇的に、横でつながる人が増えて。で、「ほかのこういう公演あるんだけど出てみない？」とかそういうのも増えてきたりして。同世代の人も多かったので、ライバルでもあるし、一緒に学ぶ仲間でもあるから、すごく毎日刺激を受けてキラキラしてました（笑）。

－つながりができるほかに、奈津子さん自身のお芝居に対する考え方が変わったとか、そういったこととかはありました？

上島：何も知らないんだなっていうことがすごく気づいてので。もっと勉強したいなとか。それまではただ劇団のお芝居に出るっていうことだけしかやってなかったんですけど。ワークショプに出てみたりとか、オーディション受けたりとか、そういうことを自分からやってみようって思って。割と引っ込み思案なので（笑）。そういう感じだったんですけど。とにかくちょっと頑張ってみようって。オーディションには落ちちゃったんですけど、ほかの地域滞在型で、札幌でそういった企画があって、「勉強したいんだったら演出部で来たら」って言ってくださったので、それで 1 ヶ月半札幌に行って、ほかの地域の人がやってる演劇作りとかそういうのを見させてもらったりとかできたので。そういうのも劇団にい

てやってるだけだったら絶対出会えなかったので。出会いが多かったかな。刺激的でした、やっぱり。

－Shang yu の旗揚げした時の、だいたいいくつぐらいの年齢でどういう人たちが集まって結成したんでしょうか？

上島：ほぼ未来樹シアターに残ってた人たちと、あと劇団無国籍の国久さんとかも入ってたんですよ。未来樹に。あともう本当に、未来樹は女性だけの劇団だったので、残ってる人女性ばかりだったので、客演を呼んできて一緒にやろうってことで、若手の方に声をかけたりベテランの方に声をかけたりとかしてやってましたね。

－これからどうしたいっていうの、何かありますか？劇団を作りたいとか。
　芝居に出続けたいとか。

上島：芝居には出続けたいですね。出続けたいし、なんか朗読とかの活動も、シンプルで難しいなって思って、今すごいはまってるので、もうちょっとチャレンジして続けたいなと思うし。60 になってもこんなおばちゃんもやってんだなみたいな（笑)、そういう、そういう感じでやり続けたいなと思ってますね。

－なんで演劇をやり続けたいんですかね。

上島：なんでだろうね。なんだろうね。私ができることで何か役立ちたいなって思うところがあるのかな。それがまずベースにはあるのかもしれないなって思ってて。それが、私は旗振って「わー、こっちですよ」っていう人間ではないんだけど。何かを伝えるみたいなことを役でっていう。それが私ができることでっていうことで続けてるのかなっていう気はしますよね。(笑)。

－30 年芝居続ける人は、周り見渡して分かる通りいないんですよ。上島さんがなぜそこまで演劇だったんだと思われますか？

上島：なんかすごい、なんだろうな。すごい私的でもいいんですか？　個人的な

あれなんですけど、たぶん、自分をもっと知りたかったんだと思うんですよね。なんだろうな。どっから話したらいいだろう。子どもの頃にさ、ドラマとか観て、その時に、役者の人が泣いたり笑ったり怒ったりとかしてるのは、すごい不思議で。なんで架空のことにこんなふうになれるんだろうとすごく思って。それが不思議でしょうがなくて。演劇の中でそれが分かるのかなって思ったのもあったと思う。『ガラスの仮面』が好きでっていうと分かるんだけど。その秘密を知りたいなみたいなところがあって、芝居をやってみようと思ったところがあるんですよね、たぶんね。そうね。で、やってくうちに、そこに起きていることを、信じられる。信じられるからこそ、その気持ちになれるんだなみたいなことがすごく、なんだろうな、分かってきたんだけど。その中で自分の中の思いとか、自分が思ったことを表現するっていうことが自分ですごい苦手で。ものすごく苦手で。悲しんでるんだけど、心は悲しいんだけどすごくポーカーフェイスでいたりとか、怒りたいんだけど、うんと我慢してるとか。子ども時代そういう感じだったような気がするんですよ。自分の中で。で、演劇をやることで、役を身にまとうことで、私の抑えていたものがぶわっと吹き上がる瞬間っていうのが出てきて。私の中にこんな自分が。で、出していいんだとか、ここは許してくれるんだみたいな、もしかしたら、テレビドラマとか観てて、演技を観て、こういうことなのかなとか、自分の中でなってきて。それでもやっぱり頑なな自分とかもいて。自分を見つける、自分が気が付かない自分とかを探っていく作業みたいな感じなのかな。それが面白かったりとか、できなくて辛かったりとか。そういうのも含めて、じゃあ次はどうだろうって思うから、続けてきたような気はするし、たぶん未だに分かってない自分とかがいるような気がするし、もっと解放できるものとかあるんじゃないかなと思って。それを探したくて、気付けば30年みたいな感じ。な気がします。かな。私はそうかな。だから、自分と切って切れないっていうか、そういう感じがする。